参考資料１

第１回準備委員会　主な意見

田中 委員長	・ 診療科別医師数が全国比 80%未満の科は様々な支障あり。特に内科は 70%台が多く、細分化されているため一つの大学で全分野のカバーは困難 ・ 医学と医療は表裏一体で、医学がなければ医療も発展しない。医学的な知識や研究の経験は、医師の実力を伸ばすのに必要 ・ 人口減少の中で医学部がなくなれば附属病院と大学院が残る可能性。医科大学院はその先駆けになり得る。 ・ 浜医、京大、慶応と連携して有意義な研究ができれば優秀な医師が集まる。 ・ 県大薬学部や静大の理学部、農学部との連携ができれば、大学の発展だけでなく、静岡市に若い人を呼び込む力になる。
伊藤 委員	・ 医科大学院ができれば質の高い医師が増える。 ・ 最近の学生は専門医を取りたいが、学位の意味に疑問を持つ人が多い。 ・ 若い人たちはヒューマンサイエンスなど、新しい医療につながる研究を求めている。学生のニーズに合致した研究領域を設定し、学位取得後も臨床しながら研究を続けることができれば静岡に残る可能性 ・ 工学部と組み新しいデバイスを作るなど、医学以外の領域との連携も魅力 ・ 大規模な新しい臨床研究が県内各地の病院でスムーズにできるシステムをつくることができれば更に魅力的
岩井 委員	・ 大学には病院への医師派遣機能があるが、本県にはセンターがないのでは。 ・ 医療だけでなく、研究もできるスタイルをつくることが大事。 ・ 内科系の医師不足分野は浜医と協力して補充できる構想が必要 ・ ヒューマンバイオロジーをやりながら病気をやれる時代になってきた。病院があるところに大学院大学をつくるのであれば、大学並みの人数のレベルの高い指導医を集めるのは難しいが、研究のサポート体制をつくり、臨床しながらヒトのサンプルで研究できるのは魅力 ・ 医学部のコピーでなく、新しいタイプの大学院大学を目指すべき。
浦野 委員	・ 奨学金被貸与者を指導する体制が不十分。指導医もできる人たちが集まれば教育面でも貢献が期待できる。 ・ 社会健康医学大学院大学は、学生が社会人であることや、統計などをシステマティックに学べることで意欲的。高いレベルの研究ができ、サポートも充実させれば新しい大学院ができる。
木苗 委員	・ 医師を目指す学生を増やすためには、小学生から医師や看護師と子供たちが接する機会が必要

小林 委員	・ 医学修学資金被貸与者の定着が課題。大学院も一つの手段だが、基幹病院を東部、中部で増やして指導医を充実させることが重要 ・ 優秀な教育者、教育がしっかりされた医師を増やすことは大賛成 ・ 教官に県内の人材を集めると更に手薄になる。県外からの確保が課題
中西 委員	・ 産科や救急科の医師の少なさは、安心、安全と言えるのか疑問な数字 ・ （新たなデバイス等）産業界も一緒にやっていければ。
宮地 委員	・ 弱点とされる領域で優秀な人を県総に集め、コアをつくり、教授として兼任する。それが魅力になる。 ・ 医師が「静岡県に定着したい」「専門医を取りたい」となる魅力を感じる大学院であることが必要。他大学にない静岡県の特色など、どうすれば人が集められるかという着眼点が求められる。専門医と学位は両立できる。 ・ 静岡県で専門医が取れて、東部を中心に広がるようなスキームが必要 ・ 大学院に入る時の一番の問題は、臨床から離れ、アルバイト生活になって基礎実験をしなくてはならないこと。静岡県に定着して生活できるようにし、臨床しながら優秀な指導医から指導を受けることができれば研究を続けられる、それは魅力と感じる人が増える。
渡邉裕 委員	・ 特に神経内科、アレルギー、リウマチ等の医師が少ないことは重要な問題 ・ 浜医の大学院は充足しており、定員を増やす議論もある。
渡邊昌 委員	・ 若い人は外に出ていろんな経験をしたい。県外に出ても戻ってくる、戻ってきてもいい仕組みづくりが重要 ・ 医学だけではなく、様々な要素が入った大学院を目指すべき。 ・ 医師の質を高めるための大学院をつくるという考え方

参考資料２

（仮称）医科大学院大学基本構想　項目（案）

（仮称）医科大学院大学基本構想	
１　大学院大学の設置目的	
２　大学院大学の概要	
	(1)　基本理念
	(2)　基本方針
	(3)　想定する研究分野
	(4)　養成する人材像
	(5)　取得できる学位
	(6)　入学定員
	(7)　附属病院

参考資料３

（仮称）医科大学院大学が目指す方向性

・　（仮称）医科大学院大学の目指す方向性について、第１回準備委員会における委員発言や他大学院の事例を参考に、事務局が以下のとおり整理

設置目的 （基本理念）	項　目 （基本方針）	
新しい医療を目指す学問や研究に取り組み、高度な研究能力と診断能力を有する人材を育成し、地域医療及び国際社会に貢献する最先端の研究拠点を形成する。	独創的な学問・研究への取組	ヒューマンサイエンスなど、新しい医療につながる独創的な学問・研究への取組
	優れた臨床研究医の育成	高度な研究能力と診断能力を兼ね備え、臨床の現場で活躍する医療人材（フィジシャン・サイエンティスト）の育成
	研究拠点の形成	既存の枠を越え、地域の特性を活かした最先端の研究拠点の形成
	地域医療への貢献	研究成果の還元、医療人材の育成、大学院の資源活用による地域医療への貢献
	国際社会への貢献	海外の研究機関と連携した世界水準の研究推進による国際社会への貢献

・　項目別の主な意見等を以下に記載

１　独創的な学問・研究への取組

＜ヒューマンサイエンスなど、新しい医療につながる独創的な学問・研究への取組＞

・　医学と医療は表裏一体で、医学がなければ医療も発展しない。
・　どうすれば人が集められるかという視点から、他の大学院にはない特色を打ち出すべき。
・　若い人たちはヒューマンサイエンスなど、新しい医療につながる研究を求めている。
・　ヒューマンバイオロジーをやりながら病気をやれる時代になってきた。
・　臨床しながらヒトのサンプルで研究ができるのは魅力になる。研究をサポートする体制の構築が必要
・　浜松医科大学、京都大学、慶応大学と連携して有意義な研究ができれば、優秀な医師が集まる。
・　工学部と組み新しいデバイスを作るなど、医学以外の領域との連携も魅力になる。
・　疾病に加え、予防、健康などに関し、山間部などの地域特性を活かした研究拠点は優位性がある。
・　高いレベルの研究ができ、教員のサポートも充実させれば、既存の医療分野の壁を越える新しい形の大学院ができる。